

李永平の孤独とアイデンティティについて

卞 惟行*

about the Loneliness and Identity of Li Yongping

Iko Ben

Abstract: Li Yongping is a Ethnic Chinese writer born in Malaysia. He is living in Taiwan now, and has a strong identity as a "homeland" in China. However, he wrote the theme of discrimination towards native Chinese residents and female contempt in his works. He is definitely not justifying China. In current time, the conflicts between nations and ethnic groups are constantly happening. Maybe it's important to see things one step back as Li Yongping does.

Keywords: Li Yongping, identity, loneliness

はじめに

著者の父は中国人、母は日本人で、李永平の『拉子婦』で言うところの“半唐半拉”（半分は華人で、半分は未開人。“拉”は蔑称）である。

日本にいるときには中国は貧しい国と蔑まれ、中国に来れば“日本鬼子”（日本人に対する蔑称）と責められた経験がある。どちらの国にも帰属感を感じることができず、自分はどこにいても“外国人だ”と思って暮らしてきた。

著者は生まれた時点では、当時の日本の法律に従って父と同じ中国国籍だった。その後華僑という立場で中国に渡って広州の暨南大学に入学した。将来日本に帰国した後、日本に帰化することを考えていたのだが、中国の一部親戚からは「日本国籍になるのなら、もう中国人じゃない！今までのように良くしてやらないぞ！」と叱られ、一方で暨南大学にいる香港の友人からは、「おまえは日本パスポートを取るチャンスがあるのに、なぜ日本に帰化しない！国を愛しているとかどうかは自分の心の中で思っていればいいことじゃないか！」と諭された。当時中国パスポートでは、台湾は言うに及ばず、韓国、マレーシア、インドネシアなどの国に行くことも容易ではなく、欧米などの国に行くにも面倒な手続きをしなければならず、将来ビジネスや旅行することを考えれば、日本パスポートという便利な“通行証”を持っていた方が良いという考え方だ。

著者が在学した暨南大学は自らを華僑最高学府と称していた。中国の他の学校とは別の試験を実施し華僑と香港、マカオの学生を多く受け入れている（広い中国で、このような入試を実施し

* 基盤教育機構（非常勤講師）

ているのは、暨南大学、華僑大学と2校しかないのだが)。中国本土の学生だけでなく、これら他の国、地域から来た中国系の学生たちの中には複雑な経歴を持っている人もいて、先ほどの著者に日本に帰化することを勧めてくれた友人は、中国広東省に生まれ、マカオで育ち、ベネズエラの国籍を持ち、大学卒業後は香港で暮らしている。また別の友人は北朝鮮の華僑で、平壤に生まれ、大連に渡り、暨南大学で学んだあと、韓国に行き、現在は北京の韓国企業で働いている。広州の同級生の父親はカンボジアからの帰国華僑で、文化大革命のとき紅衛兵に殴られて腰が曲がっていた。もちろん一口に華僑華人と言っても、その価値観はそれぞれに違うが、その多様性を感じ、彼らが中国に対してどう考えているのか興味をもつようになった。

1、李永平について

東南アジアは約6億の人口を擁し、その中でもマレーシアは全人口約2825万人の26%が華人で、国土の小さい都市国家のシンガポールを除き華人の人口比率の高い地域である。とは言っても、この国はイギリス及び西洋の国によって作為的に作られた国で、マレー半島とボルネオ島の一部（東マレーシア）が主な国土だが、最近までマレー半島からボルネオ島に渡るにはマレーシア国籍であってもパスポートが必要であった。

このマレーシアの華人がどのように暮らし、中国や台湾に関してどのような考えを持っているのか、著者は中心部クアラルンプールやペナン島より西洋に作為的にマレーシアに組み込まれたボルネオ島出身の華人作家に着目した。

李永平はボルネオ島で生まれ育ち、1947年に生まれた時点ではイギリスの植民地でイギリス国籍、マレーシアの誕生とともにマレー半島と一緒にマレーシア国民になった。

しかし5.13事件（マレー系住民と中国系住民の衝突による流血事件）や、その後に施行されたブミプトラ政策（マレー系住民優遇政策）なども見てきたわけで、マレーシアという国には、ほとんど或いは全く帰属意識はないと感じられる。彼はインタビューの中で、父親からイギリス留学を望まれながら、結局台湾に留学したことを、そして中華民国（台湾）の国籍を取得した後、すぐさまマレーシアの国籍を放棄したことを話している。

彼は、このインタビューの中で、作家とは孤独であり、だから作品を生み出すことができるのだと語る。ただ孤独のかたちも人それぞれで、彼はアメリカで博士号を取得した後も、いろいろな可能性がある中、台湾に戻ってきた。そして台湾の大学の仕事をしながらも、3年を要した由で、受け入れてもらえないという気持ちは心の中に強くあったのではないか。

2、二者択一

林開忠氏は、『従李永平的《婆羅洲之子》与《拉子婦》談起』（『李永平の《ボルネオの子》と《拉子婦》から話す』）で李永平の少年時代をこう評す。「李永平は自ら“円満な家庭”で生まれ育ち、“幼いころから厳しい家庭教育を受けた」と語る。（中略）1961年から1963年、彼はクチンの中華第二中学で初級中学時代を過ごし、高級中学（＝高校）はクチンの中華第一中学で終えた。この中学

時代（中学、高校時代）は、ちょうどサラワクが政治的に困惑していた時代で、サラワクの共産ゲリラ組織活動の所要人物である洪楚庭のインタビューを参考にすると、遠い以前の20世紀50年代の末60年代初頭、サラワクの若者、特に中国系の若者は国際間の社会意識の変化や多くの文化思想の影響と衝撃の下、熱い情熱で、一方で自らを充実させるために努力し、一方で積極的に群衆を組織した。その目的は、サラワクを英国の植民地統治から脱し、独立自主を勝ち取るためだ。当時サラワク域内で1950年から共産主義組織が華人学校の中で学生を指導し、英国植民地主義、反人民の教育政策に反対する考えを教え込んだ」。（中略）

「しかしこの間の歴史を李永平の作品の中からは見つけ出すことは難しい。成長過程にある李永平にとって、この間のことにまったく何も感じないというのはありえない。実はこのような状況は、作家にとって難しい二者択一になる。もし毅然と共産主義運動の闘争にのめりこめば、意識の中でそこから離れることができなくなってしまう、更に政治の端っこに追いやられ、政府の一番の敵にされてしまう。しかし植民地政府を支持することを選択すれば、最低限の生命と安全は保障されるが、おそらく植民地政府の文化宣伝の道具にされることは免れない。『婆羅洲之子』はサラワク州のこのような政治環境の中では、後者の道を辿るのは運命である。これは作者の選択とは言い難く、おそらく植民地政府に利用されたのだが、あのような状況の下では理解できることだ。或いはこのような難しい二者択一の状況があったからこそ作者は最終的に感情をぶつけられるテーマを見つけたのかも知れない」と実際に李永平の心の中にあったかどうか分からない“二者択一”を求めてしまう。

3、“拉子婦”に対する二重蔑視

更に林開忠氏は『『拉子婦』は李永平が台湾大学外国語学部在学中の作品で、1971年に書かれ、彼の中篇『婆羅洲之子』から5年の時間を経ており、題材においてたくさんの似通っている部分があり、両作品の執筆環境の違いはあるが、たくさんの共通点がある」と語る。この作品もやはり民族間の軋轢（差別）を題材にした作品である。

李永平は高校卒業後、中国に留学することも考えたそうだが、文化大革命でそれは叶わず、台湾大学に進学し、在学中に『拉子婦』を発表する。

華人の長老は三叔（三番目の叔父）が、ダヤク族の女性と結婚したことが不満で、一家の大半の人は冷たい目を向けている。“私”を含む子供たちも深い意味を知らず“拉子”と呼んでいた。ある日“拉子婦”が、お茶を出すときに屈まなかったことに腹を立て、長老はそのお茶をひっくり返した。この行為からも華人の秩序に従わない野蛮人、そして女性は男性に従うものという女性蔑視の価値観が現れている。

その後、三叔は華人の若い18歳の女性と暮らすようになり、年齢以上にしわが増え、必要のなくなった“拉子婦”は、子供たち共々三叔から暴力を受け、森林の中の小屋に追いやられてしまう。成長した“私”と“二妹”は、“拉子婦”に関心を寄せるが、三叔は“拉子婦”が病気になっても医者に連れて行くことを拒み、結局“私”は台湾留学後に“拉子婦”死亡の知らせを聞く。

“拉子婦”は、気立ても良く、ある程度華語（中国語）を喋ることが出来、三叔の家族に溶け込む努力はしていたはずだ。そして混血である著者にとって印象深いのは“拉子婦”共々、その子供たちも森林の小屋に追いやられてしまったことだ。三叔と“拉子婦”の子供は、男権主義である古い中国の考えでは、一家に迎えられののではと考えられるのだが、結局“半唐半拉！”と父親である三叔から怒鳴られ、“中華民族（漢民族）”として純血ではないことから、母親同様に切り捨てられる。

4、相手に対する一面的な見方

現在の中国と日本の関係は国交正常化以来最悪の状態と言われ、テレビをつければ相手の非難、本屋に行けば相手の脅威を喧伝する書物が並ぶ。

中国の著名な作家梁曉声は1995年に日本を訪問している。彼は『95随想録』の中に収録されている『感覚日本』（『日本を感じる』）で、女性を“都市の動く芸術”だとし、日本女性の印象を語っている。彼の元々の日本女性のイメージは朝鮮族のように鼻が平らで背が低く0脚であったのだが、実際日本に来て地下鉄に乗ってみると日本の女性は背が高く、脚もまっすぐであり、男尊女卑のこの国では不細工な女性はなかなか外に出てくることは出来ず、社会から疎外され、その復讐のためにオウム真理教の犯人のように極端な道に走るものも出てくるのだと決め付けている。

また深夜のテレビ番組の中の水着姿で男性に触られている女性を見て“二百五”（ろくでなしの意味）で男性に飼い慣らされていると語り、日本女性の中には中国女性にはいた英雄が過去にも存在しなかったし、これからも存在しないだろうと結論付けている。

一方で日本では昨年『中国美女の正体』という本が出版された。著者は宮脇淳子、福島香織の二人で、宮脇はモンゴル史、チベット史などの専門で、大学で教鞭をとり、福島は産経新聞の記者で、復旦大学に一年留学した経験がある。彼女ら二人の対談形式で話が進められていて、例えば恋愛に関して、「中国文学で素晴らしい夫婦愛が描かれたのは、清代の沈復の『浮生六記』ぐらいで、女性は漢字を理解する人はほとんどおらず、男性と同じレベルでものを語ることなど不可能だった。張芸謀の『初恋のきた道』などは中国映画や文学の新しい出発だとし、現在の若い人たちは恋愛小説を書き、それは日本の小説の影響を受けており、テレビドラマなども日本のドラマをそのまま中国の俳優に置き換えただけ、中国の小説は非常に層が薄い、純粋に作品だけで食べていける作家は10人いるかどうか、他の作家は例えば軍の文芸工作団に所属していたり、新聞社のお抱えの小説家になったりしている。心の情愛を描いたり、感情を通わせるような日本的な小説を中国政府は認めてこなかった。本屋には渡辺淳一の不倫小説や村上春樹の小説は平積みになっている。中国国内に面白い本がないから、外国作品の翻訳をよくやり、そのレベルはすごく低いのだが、面白いと感じる心はあるわけだ」などと語り、最終的に「文化レベルが低いのだ」と結論付ける。

中国と日本は水と油のような関係で、今後、多くの場面で相容れぬことは続くと思われる。

先に挙げた中国或いは日本の文化人や論客は自分自身、そして自らの国の利益を語り、国民も

教育やメディアにより自らの正統性と相手を批判し続けている。著者は過去に二重国籍を許さない中国と日本の間で国籍の選択を強いられたが、今後も関係悪化に伴い、どちらの国にいても“二者択一”を迫られることがあるかも知れない。“自分の父親が好きか？母親が好きか？”と問われて多くの人が答えられないようなもので、苦しい状況に追い込まれるかも知れない。また二国間のみならず民族主義の高揚は他を排除する排他主義に陥りはしないか？という心配もある。

5、帰属意識

李永平は、馬華作家（マレーシア華語文学の作家）と呼ばれることを好まない。ボルネオ島に生まれた彼は、クアラルンプールにもほとんど行った事がなく、他人からどこに帰属意識を感じるか？と問われるとマレーシアではなく、台湾でもなく、両親の本籍地である広東と話している。

同じ馬華作家の黄錦樹は、「彼は文化大革命がなかったら中国に行っていただろうし、最近中国で出版された『大河尽頭』の簡体字版で「致“祖国読者”」（祖国の読者への挨拶）と中国に対して“祖国”という言葉を使い、彼の心は中国にある」と指摘している。

ただ華人とは言っても、その多様性は一言では語りつくせない。李永平は両親ともに中国から渡ってきた華人で、幼いころから中国語での教育を受け、またマレーシアの成立前後の混乱も見てきた。自らを“南洋浪子”（南洋からの放浪者）と話し、マレーシアから台湾、アメリカと渡り、最後に台湾の地を選んだ。いったんは精神的に離れてしまったが、しかし故郷を忘れてしまったわけではない。彼は『吉陵春秋』では、中国と思われる街を描き、『海東青』では台湾を描き、最近の『雨雪霏霏』では、ボルネオの情景を描き出している。

最後に

多くの中国及び東南アジア華語文学の作品が民族間の矛盾を扱っている中で、その大半は中国人、華人が被害者という立場で描かれているのに対し、逆に『拉子婦』では加害者の立場で描いている。そして被害者である“拉子婦”の言葉や考えは作品の中でほとんど語られていないのだが、逆に言葉すら発することができない、人間として扱われていないことを強く感じさせる。“拉子婦”の中の“半唐半拉”は著者自身がそうであり、時代や場所が悪ければ、同じような扱いを受けたかも知れないと深く考えさせられた。

最近の多くのメディア等の論調では、一方的に片方が正義、もう片方が悪と決め付け、ある一方の主張に沿う内容のことが多いが、時にはこの李永平のように複合的にものを考え、一步退いた目で見つめることが大事なのではないだろうか。

参考文献：

- 1、王徳威 《原郷想像、浪子文学》： 2003年8月3日 自由時報新聞網 自由副刊。

- 2、伍燕翎・施慧敏 《浪遊者－李永平訪談録》： 2009 年 3 月 14 日及び 21 日 星州日報。

引用文献：

- 1、梁曉声 《95 随想録》： 1996 年 5 月第 2 版 新疆人民出版社。
- 2、林開忠 《“異族”の再現？－李永平の《婆羅洲》及《拉子婦》談起： 2003 年 7 月 13 日 星州日報。
- 3、宮脇淳子・福島香織 《中国美女の正体》： 2012 年 4 月 14 日第 1 版 フォレスト出版。
- (平成 25 年 3 月 31 日受理)